

知覚の哲学

——色彩現象を中心にして——

村田 純一

知覚経験は世界のなかの諸事物やその性質を経験する最も直接的な経験であり、世界についての知識を得る最も基本的なあり方である。他方で、知覚経験を特徴づけているのは、その対象が何であるか（「知覚内容」）、のみではなく、その対象がどのように現れているか、という対象の現れ方にかかわる要因である。視覚においてはモノの見え方、聴覚においては対象の聞こえ方、触覚においては対象の感じられ方などが、感覚様相に応じた体験の特有性を示している。また、同じ感覚様相内でも、この現れ方に関する区別は大きな意味をもつ場合がある。例えば、夕日の赤と郵便ポストの赤とは、同じ赤色でも、その現れ方は異なっており、美的価値が問題になる場合などでは、その違いが決定的な意味をもつことになる。

知覚における「何」にかかわる契機を認知的要因、「いかに」にかかわる契機を感覚的要因と呼ぶとすると、知覚経験の固有性を作っているのは、この両者が切り離せない仕方結びついている点にある。そして、知覚をめぐる哲学的問題、あるいはまた、心理学的問題は、この二つの要因の関係をどのように考えたらよいのかという問題に根をもっている。認知的要因を重視し、そこに知識の起源を求めれば、主知主義ないし合理主義の見方が生じるし、感覚的要因を重視し、そこに知識の起源を求めれば、感覚主義や経験主義が生じることになる。

また、二つの要因の存在論的身分をめぐる、実在と現れをめぐる問題や、第一性質と第二性質の区別の可能性をめぐる問題が生じてくる。さらには、知覚経験に特有な感覚要因はクオリアという名で呼ばれ、意識をめぐるなぞの中核を形成している。こうして、知覚をめぐる問題は、認識論から、存在論、さらには心の哲学に至るまで、伝統的哲学のなかで根本問題の発生場所であり続